

教判論より見た禪淨二教の比較

藤 原 了 然

(一)

仏教に於ける教相判釈というものが、その成立の動機から眺めるにせよ、後代に於ける立教開宗なるものの必須要件的な立場において考えられるにせよ、それは何時の場合においても、仏教の統一亦は仏教の組織化という意図を度外視して理解するべき性質のものではない。従つて言いかえれば、仏教の教相判釈なるものは、発展的に分科していく仏教思想の統合整理の意味がその本質的なものであるといつてもいいはずである。

この見解が容認されるとするならば、過去に於て存在していた、あるいは現存している各宗各派なるものの誕生又は淵由は、勿論その宗の祖師又は開祖と呼ばれる人師の、創意工夫に出づるものではあるが、他面よりするならば、仏教思想が、時・処・位に応ずる演

繹と帰納との期を得た事象であるといつていいであらう。この故に、各宗各派の教相判釈なるものは、夫々の独自性を顯著に打出しているもの、(この故にこそ一宗開創の意味が認められるのであるが)、その実質に於ては、その何れもが、仏陀釈尊教説の正義に対する嫡流正系を強調する这一点に於て、極めて酷似性の強い共通性を有しているものと考えらるべきである。このことに關して、仏教各宗各派の中で、色々な意味で、双壁又は両極と眺められている禪と淨土教との教判の比較といふことは異常な関心が払われていゝことである。

(二)

淨土の教判は、淨土的諸派によつて各の特色を有し

ていることは、今更いまでもないところであるが、こゝでは、これらの共通的源泉と考えられる法然の選択集の教判について考えてみる。選択集の教判が、インド、シナ、日本に亘る三国浄土教を基礎として、これらを綜合統一すると共に偏依善導の標幟に伝統を明かにしている。

インドの龍樹の難行易行の判釈、シナにおける曇鸞の自力他力の判釈、つゞいて道綽の聖道門浄土内の教判は、正しく選択集の巻頭に於て依憑されているところであるが、これは浄土一門の珍重大事するところであつて、浄土教判の基幹をなすものといえよう。

すなわち、選択集の初頭に

「安樂集の上に云く。問うて曰く、一切衆生は、皆仏性あり、遠劫より以来、応に多仏に値えるなるべし。

何に依つてか、今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して火宅を出でざるや。答えて曰く、大乘の聖教に依るに、良(まこと)二種の勝法を得て、以て生死を排せざるに由る。これを以て火宅を出でざるなり。何者をか二となす。一には謂わく聖道、二には謂わく往生浄土なり。其の聖道の一種は今の時証し難し。一には大聖

を去ること遙遠なるに由る。二には理は深く、解は密なるに由る。是の故に、大集・月藏經に云く、我が末法の時の中に、億億の衆生、行を起し道を修せん、まだ一人も得る者あらじ。当今は末法、現に是れ五濁惡世なり、唯だ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。是の故に、大經に云く、若し衆生ありて、たとひ、一生惡を造るとも、命終の時に臨んで、十念相續して、我が名字を称せんに、若し生ぜずば正覺を取らじと。又復た、一切衆生は、都べて自ら量らず、若し大乘に依らば、真如実相第一義空曾つて、未だ心を措かず。若し小乘を論ぜば、見諦修道に修入して、乃至、那含羅漢に、五下を断じ、五上を除くこと、道俗を問ふことなく、未だ其の分あらず、たとひ、人天の果報あれども、皆五戒十善によりて、能く比の報を招く。然るに持ち得る者は基だ希なり。若し起惡造罪を論ぜば、何んぞ暴風驟雨に異ならん。是を以て、諸仏大慈勸めて、浄土に帰せしむ。たとひ、一形惡を造るとも、但だ能く意を繫けて専精に常に能く念仏すれば、一切の諸障自然に消除して、定んで往生を得、何んぞ思量せず

して都べて去る心なきや」(土川勸学宗学興隆会刊本による)

この一文は、浄土教判提唱の要中の要とさるべきものであるが、この叙述の中には多く問題が含まれていると共に、亦少からぬ反論を惹起すべき趣旨が見出される。すなわち、末法観の高調による他宗他教義に対する見解についての反論、浄土或は往生なるものについての内容や程度に関する問題、十念と往生との間に於ける因果論的追及、特にいわゆる聖道諸宗なるものに対する無効拒否的態度等は、著しい難点とされ攻撃の素材でもあつたのである。

けれども、これらに対する大局的説明は、次の法然の私釈に於て説明され、これが浄土教徒の基本的見解とされていることはいうまでもない。それは要約していえば、先輩諸師の言を依拠とし、インド、シナ、日本に亘つて昭々たる法詠、伝統の存することを明らかにするものであるが、その表現は、内に燃える激しい信念にも拘らず、多分に時代的な色彩を具えた当時の教権に対する配慮が伺われるものである。たとえば、「ひそかに計みれば、夫れ立教の多少は、宗に随つ

て不同なり。且らく、有相宗(法相宗)の如きは三時教を立て、一代の聖教を判ず、いわゆる有。空。中これなり。無相宗(三論宗)の如きは二藏教を立て、以て一代の聖教を判ず、いわゆる菩薩藏、声聞藏これなり。華嚴宗の如きは五教を立て、一切の仏教を撰す。いわゆる小乗教、始教、終教、頓教、円教これなり。法華宗の如きは四教五味を立て、一切の仏教を撰す。四教とは藏。通。別。円これなり。五味とはいわゆる乳。酪。生。熟。醍醐これなり。真言宗の如きは二教を立て、一切を撰す、いわゆる顯教。密教これなり。今、此の浄土宗は、若し道綽禪師の意に依らば、二門を立て、一切を撰す、いわゆる聖道門。浄土門これなり。

問ふて曰く、夫れ宗の名を立つることは、もと華嚴・天台等八宗九宗に在り、未だ浄土の家に於て其の宗の名を立つることを聞かず。然るに今、浄土宗と号すること何んの証拠あるや

答へて曰く、浄土宗の名、其の証一にあらず。元曉の遊心安樂道に云く、浄土宗の意は、もと凡夫のためにし兼ねて聖人のためにすと。又、慈恩の西方

要決に云く、此の一宗に依ると。又、迦才の淨土論に云く、此の一宗ひそかに要路なりと。其の証かくの如し、疑端に足らず。但し、諸宗の立教は正しく今の意にあらず、且らく淨土宗に就て略して二門を明さば云々」

引きつゞいて終りの部分に明かされている淨土宗の師資相承血脈に到つては更に上述の色彩は顕著である。

(三)

これに對して、その教義の立て前から、特定の信仰対象を設定せず、また一代仏教の中で何れを所依の經論と定むることなき禪宗の教判（それは教判という名に値しないものといわるべきであらうが）は、極めて異色あるものと謂わるべきであらう。いうまでもなく禪教に於ける一代仏教に對する立場は、それが仏心宗と別語されているように、經典の文学や表現を離れて直接、仏心そのものに直参しようとするものであるから、一切の經典や論書を以て、いわゆる「魚兔の筌蹄」「月をさす指」と解するものであり、不立文字、教外別伝の立場をとる以上、これは当然のことと考えられ

る。

禪教判の面目を物語るものとして、特に惹目にすべきものゝ一として次の一文は最も印象的である。すなわち、日本に於ける曹洞宗の祖である道元の主著、正法眼藏仏道の巻には

「仏祖正伝の正法眼藏、涅槃妙心、みたりこれを禪宗と称す。祖師を禪祖と称す、學者を禪子と号す、あるひは禪家流の自称あり、これみな僻見を根本とせる枝葉なり、西天東地、從古至今、いまた禪宗の称あるを、みたりに自称するは、仏道をやぶる魔なり。仏祖のまねかざる怨家なり、……たとひ禪那なりとも、禪家と称すべからず。いはんや禪那いまた仏法の總要にあらず、しかあるを仏々正伝の大道を、ことさら禪宗と称するともがら、仏道は未夢見在なり、未夢聞在なり、未夢伝在なり、禪宗を自称するともがらにも、仏法あるらんと聴許することなかれ、禪家の称たれか称しきたる、諸仏祖師の禪宗と称するいまたあらず、しるへし禪宗の称は魔波旬の称するなり、魔波旬の称を称しきたらんは、魔賞なるへし、仏祖の兒孫にあらず。世尊の迦葉大士に付屬しますます、

吾有正法眼藏涅槃妙心なり、このほかにさらに吾有禅宗付属迦葉にあらず、並付僧伽梨衣といひて、並付禅宗といはす。しかあればすなはち世在世に禅宗の称またくきこえず、……いましめすところ、諸仏無常妙道、およひ正法眼藏、ならひに諸仏法印なり、当時すへて禅宗と称することなし、禅宗と称すへき因縁きこえず、いまこの正法眼藏は、揚眉瞬目して面接しきたる身心骨髓をもてさづけきたる、身心骨髓に稟受しきたるなり、身先身後に伝授し稟受しきたり、心上心外に伝受し稟受するなり。世尊迦葉の会に禅宗の称きこえず。初祖二祖の会に禅宗の称きこえず、五祖六祖の会に禅宗の称きこえず、青原南嶽の会に、禅宗の称きこえず、いつれのときよりたれ人の称しきたるとなし、学者の中に学者の爲すにあらすして、ひそかに壞法溢法のともから称しきたるならん。仏祖いまた聴許せざるを、晩学みたりに称するは、仏祖の家門を指するならん。また仏仏祖の法のほかに、さらに禅宗と称する法のあるにたり、もし仏祖の道のほかにあらんは、外道の法なるへし。すてに仏祖の児孫として、仏祖の骨髓面目を参学すへし、仏祖の道に投ず

るなり、這裏を逃逝して外道を参学すへからず、まれに人間の身心を保任せり、古来の弁道力なり、この恩力をうけて、あやまりて外道を資せん、仏祖を報恩するにあらず、大宋の近代、天下の庸流、この妄称禅宗の名をききて、俗徒おほく禅宗と称し、運磨宗と称し、仏心宗と称する妄称きほひ風聞して、仏道をみだらんとす、これは仏祖の大道いまたかつてしらす、正法眼藏ありとたにも見聞せず、信受せざるともからの乱道なり、……しかあればしるへし先仏伝受の仏道は、なほ禅定といはす、いはんや禅宗の称論ならんや、あきらかにしるへし禅宗と称するは、あやまりのはなはたしきなり、つたなきともから有宗空宗のことくならんと思量して、宗の称なからんは、所学なきかことくなけくなり、仏道かくのことくなるへからず、かつて禅宗と称すと一定すへきなり、しかあるに近代の庸流、おろかにして古風をしらす、先仏の伝受なきやから、あやまりていはく、仏法の中に五宗の門風ありといふ、これ自然の衰微なり、これを極済する一個半個いまたにあらず、云々」(大久保道丹編、道元禅師全集二七二―二七四頁)

以上の所論は、その筆法痛烈を加えるかの感があるが、その云わんとするところは、古仏先祖の示教に従つて、存する仏法は、たゞ釈尊以来、嫡々を相伝し來つた正伝以外に何ものも存する理なく、別に禪宗なるものゝ存するが如く考えるのは、大いに仏意を離れたものであることを力説すると共に、禪宗内に於て、五家を分つが如きは、ますますその途を誤るものであると道破したものに外ならない。更に曹洞宗という名称に關しても、同じ論法が採用されている。

「洞山大師、まさに青原四世の嫡嗣として正法眼蔵を正伝し、涅槃妙心開眼す、このほかにさらに別伝なし、別宗なし、大師かつて曹洞宗と称すへしと示衆する拳頭なし瞬目なし、また門人のなかに庸流ましはらされは、洞山宗と称する門人なし、いはんや曹洞宗といはんや、曹洞宗の称は、曹山を称しくはなるならん、もししかあらは雲居同安をもくはへのすへきなり、雲居は人中天上の導師なり、曹山よりも尊崇なり、はかりしりぬこの曹洞の称は、傍輩の臭皮袋のおのれに齊肩ならんとて、曹洞宗の称を称するなり、まことに白日あきらかなれども浮雲しもおほふかことし、先師

いはく、いま諸方獅子の座にのほるもの多ほし、人天の師とあるものおほしといへとも、知得仏法道理簡渾無、このゆえにきほふて五宗の宗を立し、あやまりて言句の句にとここほれるは、真箇の仏祖の怨家なり、あるひは黃龍の南禪師の一派を称して、黃龍宗と称しきたれりといへとも、その派とほからず、あやまりをしるへし、おほよそ世尊在世かつて仏宗と称しましませす、靈山宗と称せず、祇園宗といはず、我心宗といはず、仏心宗といはず、いつれの仏語にか仏宗と称する、世尊なにのゆえにかあなかに心を宗と称せん、宗なにによりてかかならずしも心ならん、もし仏心宗あらは、仏身宗あるへし、仏眼宗あるへし、仏耳宗あるへし、仏鼻舌等宗あるべし、仏髓宗、仏骨宗、仏脚宗、仏国宗等あるへし、いまこれなし、しるべし、仏心宗の称は仮称なりということを、釈迦牟尼仏、ひろく十方仏土中の諸法実相を掌擡し、十方仏土中をとくとき、十法仏土のなかに、いつれの宗を建立せりととくかす、宗の称もし仏祖の法ならば、仏国にあるへし、仏国にあらは、仏説すへし、仏不説なり、しりぬ仏国の調度にあらず、祖道せず、しりぬ祖域の家具にあらず、

すということを、ただ人にあらはるるのみにあらざらん、諸仏のために制禁せられ、また自己のためにわらはれん、つつしんで宗称することなかれ、仏法に五家ありということなかれ」(同上 二七八頁)

所引について説明を要しないであろう。一見、想像される教理史的な疑問や、その極論を思わせられる論述は、要するところ、眞の宗——いいかえれば仏法——の在り方を最も端的に示しているものということが出来よう。

この道元の、教判どころか宗名をさえ認めえないとする立場は、仏教の各教説の中でも最も特色あるものということができる。そして禅宗諸派に於いても、この立場は、最も基本的なものと考えらるべきである。

(四)

以上は、浄土教判の肝要と、禅に於ける教判觀の面目の一斑を示したものに他ならないが、外見上、ここに伺われる両者の対比は凡そ顯著なものがある。前者が深刻な無法觀に立つとすれば、後者はその片影をも示していない。前者が彌陀大悲本願を高調すれば、後

仏心仰の正伝を昭著にしている。前者が自力他力、聖淨判を立てれば、後者は宗判の名をも留めようとしない。

しかし、これらの著しいにも拘らず、實質的には両者の間に隔絶が存するわけではない。その最も恰当なる表現を、われわれは、次の一文に見出すことができる。

「生死のなかに仏あれば、生死なし、生死のなかに仏なければ、生死にまとはす、ころは夾山定山といはれし、ふたりの禪師のことはなり、得道の人のことはなれば、さためてむなくまうけし、生死をはなれんおもはむ人、まさにこのむねをあきらむへし、もし人生死のほかにはとけをもとむれば、なかえをきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみるとするかとし、いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脱のみちをうしなへり、ただ生死すなはち涅槃とところえて、生死というふへきもなく、涅槃としてねかふへきもなし、このとき、はしめて生死をはなる分あり、生より死にうつるところうるは、これあやまりなり、生はひとときのくらゐにて、すでにさき

のちあり、かるかゆへに仏法のなかには、生すなほち不生といふ、滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちあり、これによりて滅すなほち不滅といふ、生といふときには生よりほかに者のなく、滅というときは滅のほかにものなく、かるかゆへに生きたらばたこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふへしといふことなかれ、ねがふことなかれ、この生死は、すなほち仏の御いのちなり、これをいとひすてんとすれは、すなほち仏の御いのちをうしなはんとするなり。これにとまりて、生死に著すれは、これも仏の御いのちをうしなふなり、仏のありさまをととむるなり、いとふことなく、したふことなき、このとき、はしめて仏のところにいる。ただし心をもてはかることなか

れ、ことはをもていふことなかれ、たたわか身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへにかけいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたかひもてゆくとき、ちからをもいれず、ころをも、つひやさすして、生死をはなれ仏となる。たれの人かころにととこほるへき、仏となるいとやすきみちあり、もろもろの悪をつくらず、生死に著するころなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふころなく、ねがふころなくて、心におもふことなくうれふることなき、これを仏となつく、またほかにたつぬることなかれ」(同前書四四〇頁)